

連載  
第46回

## 福聚山史

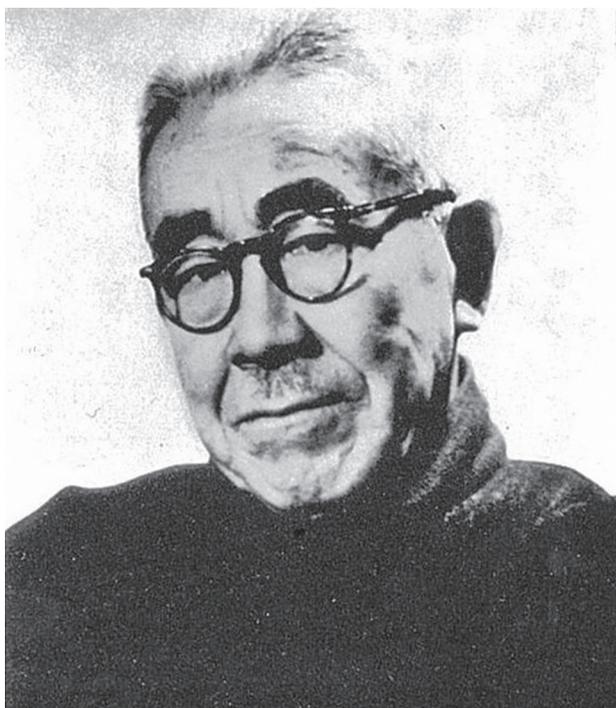
池浦 泰憲 文  
及川 一晋 編

## 「日本一のフランス

## 文学者——辰野 隆」

「やがて、あから顔の教授が、ふくらんだ袍をふらさげてあたふたと試験場へ駆け込んで来た。この男は、日本一のフランス文学者である。われは、きょうはじめて、この男を見た。なかなかの柄であって、われは彼の眉間の皺に不覚ながら威圧を感じた。……」

(太宰治『逆行』より)



中学時代に、大の相撲好きであった父金吾から相撲部屋に入門させられている。自身は昭和二十五年（一九五〇）から七くなるまで横綱審議委員をつとめた。法名「文徳院殿自在日隆居士」。

太宰治こと津島修治は、昭和五年（一九三〇）に東京帝国大学仏文科（フランス文学科）に入学以来、学校へほとんど登校していなかったが、珍しく登校した試験の日、「日本一のフランス文学者」に初めて会う。この太宰治のいう「日本一のフランス文学者」こそ辰野隆のことである。

辰野隆は、明治二十一年（一八八八）三月東京に生まれる。父は、先の『福聚山史』でとりあげた建築家、辰野金吾である。府立一中・第一高等学校を経て明治四十一年（一九〇八）、東京帝国大学法科大学仏文科に入学し、大正二年（一九一三）に卒業するが、文学研究を志し、同大の仏文科に再入学する。戦前、フランス文学を学ぶ者は非常に少なく、辰野隆が入学した年も、隆一人であったという。大正五年（一九一六）に同科を卒業すると、大学院へ進み講師に、さらに大正十年（一九二一）年、東京帝国大学の助教授となり、二年間フランスに留学する。帰国後、教授に昇任し、昭和二十三年（一九四八）に定年退官するまで主任教授を務めた。

太宰治が、帝大の仏文科に進学したのは、辰野隆に憧れ、その講義を聞いた

かったからだという。東大仏文科の初めての日本人助教授として就任し、東大仏文科の基礎を築いた辰野隆の名は、青森にいた太宰にも知れ渡るほどであったようである。

## ●多くの人々との交流

辰野隆は随筆家としても著名である。その内容は多方面に渡り、多くの随筆集も発刊されているが、それらの随筆は、多くの人々との交流の中から書かれたものである。その中の『忘れ得ぬ人々』という随筆集には、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石、谷崎潤一郎を近代日本の文壇における四天王と称し、これらとの交友関係を描いている。

谷崎潤一郎とは、東京府立一中・一高時代からの友人であった。谷崎によれば、学生時代の辰野隆は運動神経に優れていたという。また、当時「今の日本で一番偉い人は誰か」という話が出た時、辰野は即座に「やっぱり森鷗外さんか夏目さんじゃないかと思う」と答えていたという。

そんな多くの交流の中で、昭和天皇を交えての「御前放談会」は、辰野隆の生涯で最も光栄なものであったといわれる。昭和二十四年二月、辰野隆は徳川夢声、サトウハチローと皇居に招かれ、「天皇陛下、大いに笑う」と紹介される、昭和天皇を前にしての放談会が実現している。

## ●弟子 小林秀雄

東京帝国大学仏文科の初の日本人教授として着任した辰野隆は、三好達治・渡辺一夫・飯島正・伊吹武彦・今日出海・中島健蔵・井上究一郎・中村光夫・森有正・鈴木力衛など、その教え子から文学研究・評論で活躍した人物を輩出した。その中で、批評家として有名

な小林秀雄は、自他ともに認める辰野の一番弟子であった。学生時代、金銭的に困窮し、学費が払えず停学となっていた小林を、辰野は、小林の知らないところで教授会において弁護し、学費を納めていたという。また、本を手にするのできない小林に、「本がなければ、オレのところまで読め」と小林に本を貸していたという。そんな師弟の関係を憶れて仏文科に身を投じた文学青年も決して少なくなかったという。

## ●多くの人々との交流に彩られた人生

昭和三十九年（一九六四）二月二十八日、辰野隆は胃ガンにより永眠する。病に伏せる病床で、辰野はうわ言を口にしたという。一つは、生来もつとも不得意な科目であった算術を解こうとして苦しんでいるもの、もう一つはフランス文学の講義の断片であったという。遺言に基づき、辰野の遺体は解剖され、角膜がアイバンクに送られたという。

没後、辰野と交流のあった人物が、常円寺への墓参の様子を次のように記している。  
「……そして寺の住職に新しい卒塔婆を書いてもらい、辰野隆先生の墓所に花と線香を捧げ、しばし佇んで黙禱、続いて持参した日本酒を墓石にかけ、四人で辰野先生のエピソードを語り合いながら、立ちん坊で酒を汲み交わすと相なる。……」  
『おやじの顔』より

これは昭和五十年頃の様子を書いたものであるが、没後十年を経ても、墓前において、生前と同じように共に酒をくみ交わす人々がいる。多くの人々との交流により彩られてきた辰野隆の人生というものが表れているのではないだろうか。

今年、辰野隆氏の没後五十年にあたる。